Osaka University Knowledge Archive

Title	『松浦宮物語』における先行物語摂取の様相 : 弁少将の琴伝受と華陽公主との恋の場面をめぐって
Author(s)	中原, 香苗
Citation	詞林. 1994, 15, p. 30-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67346
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『松浦宮物語』における先行物語摂取の様相

――弁少将の琴伝受と華陽公主との恋の場面をめぐって――

中原　香苗

一

『松浦宮物語』に先行物語の影響のみられることは、諸先学によってすでに指摘のあるところである。ことに『宇津保物語』と『浜松中納言物語』の影響が大きいことが知られている。そうした研究の成果は、萩谷朴氏訳注『松浦宮物語』（角川文庫、昭和四十五年）の脚注や補注に集約されている感がある。しかし、それらすでに先行物語の影響が指摘されている場面にも、なおそこに別の先行物語の影を見出すことが全く不可能なわけではない。

物語の一つの柱である、巻一の少将の琴の伝受と華陽公主との恋の場面も『宇津保物語』『浜松中納言物語』の二つの物語からの影響が指摘されている部分である。そして、この場面には、ことに華陽公主に関してそれらとは別の先行物語の影をうかがうことができる。

本稿は、まず、この場面においてこれまで指摘されている先行物語『宇津保物語』『浜松中納言物語』の影響を確認し、その上でそこに従来指摘のなかった先行物語の影響の見られることを指摘する。あわせて、当該場面におけるそれら物語の摂取の様相についても、考察しようとするものである。

二

『松浦宮物語』の主人公弁少将は、遣唐使として渡唐し、唐帝に寵遇される。八月十三夜、少将は望郷の念にかられて逍遙し、山上の楼で琴を弾く老人、陶紅英に出会う。少将は老人から琴を伝えられることを願うが、彼は少将には日本へ琴を伝える使命があることを告げ、琴の伝授は翁よりすぐれた琴の名手、前世の因縁によって仙人から伝授を受けた唐帝の同母妹、華陽公主から受けるべきことを説く。そして老翁の教えどおりに「しやう山」を訪ねた少将は、琴の音に導かれて華陽公主に出会い、彼女の美貌に心乱されつつも、琴の伝授を受ける。公主

も少将に心ひかれ、琴の伝授を終えた十月三日、二人は契りを結ぶ。華陽公主は「琴の声のために身を滅ぼす」との予言通り、命を落とす。

右の場面では少将の琴の伝授と華陽公主との恋を描くことが主眼となっている。このうち、華陽公主との恋の局面に関しては、佐野正人氏が『浜松中納言物語』からの影響を指摘されている（1）。氏のいわれるのは次に梗概をあげる『浜松中納言物語』巻一の主人公中納言と唐后の「さんいふ」での逢瀬の場面との関連である。

中納言は春の月の夜、望郷の想いにとらわれて逍遙し、老人と童に出会う。そしてどこからともなく聞こえてきた琵琶の音に誘われて美しい女（唐后）を見つけ、一夜の契りを結ぶ。

氏は、右の場面と『松浦宮物語』との関わりについて、「八月十三夜、陶紅英という老人の手引きによって少将は華陽公主を知り、出会うことになる……『浜松中納言物語』でも后に会う直前に老人と童に出会う場面が小さく置かれているが、定家はその老人をふくらませ、少将の使命と将来を予言する役割を与え、また山陰での春の夜を『松浦宮物語』で秋の月の夜に作りかえたものと思われる」と述べられている。氏の指摘は専ら男主人公が老人を介して女と出会うという点に限られているようであるが、両物語の当該場面には、そのほか月の夜の望郷、楽の音に導かれての女との出会い、女の容貌の描写（2）などの類似点が存する。また中納言も弁少将も、そこで出会った女と契る、という点が共通していることを合わせ考えると、この場面の少将と華陽公主の恋に関する『浜松中納言物語』の影響は、公主との出会いから契りにまで及んでいると思われる。

この場面でのもう一つの主眼、少将が琴の秘曲を受けることに関しては、周知のとおり『宇津保物語』俊蔭巻の影響が見られる。ここでそれを確認しておく。

『宇津保物語』と『松浦宮物語』で主人公が琴の秘曲を受けるまでの物語の流れを比較すると、二つの物語は①予言者があらわれて男主人公にその音楽的使命を告げ、②同時に予言者は主人公が伝授を受けるべき人物を教え、③主人公は予言者の教えに従い秘曲伝授を受ける、という類似の構造をもっていることが判明する。したがって『松浦宮物語』の少将が秘曲を受けるまでの経緯が、『宇津保物語』を踏襲したものであると知られる。

ここで両者の秘曲伝授の経路に目を転じると、『宇津保物語』では仙人から俊蔭へと伝授がなされるのに対し、『松浦宮物語』では仙人から華陽公主を経由して少将への伝授がなされていることが注意される。

『宇津保物語』では男主人公が仙人から直接伝授を受けているので、『松浦宮物語』の仙人から華陽公主への伝授は『宇津保物語』から発想されたものとはいいがたい。

また先にその影響についてふれた『浜松中納言物語』との関

係では、華陽公主は琴の名手であるという点では唐后と共通するけれども（3）、公主が秘曲伝授を受けるということは、『浜松中納言物語』からはうかがうことができない。

それでは、華陽公主が仙人から秘曲を受けるという趣向はどこから得られたものなのであろうか。

『松浦宮物語』で女性である華陽公主が秘曲の伝授を受けていることに着目すると、女主人公中の君が、その箏の技量により天人から琵琶の手を伝授されるという『夜の寝覚』のいわゆる天人降下事件が想起される。『松浦宮物語』と『夜の寝覚』では、現実の伝授と夢における伝授という違いはあるものの、女性がこの世のものならぬ霊物から秘曲を授けられる、という点が一致している。このような観点からすれば、『松浦宮物語』の華陽公主と、『夜の寝覚』の中の君との間には何らかの関連を見出すことができるのではないだろうか。管見によれば、華陽公主の造型について『夜の寝覚』の影響に言及された論考は、今のところ存在しないようであるが、結論から述べると、『松浦宮物語』の華陽公主には『夜の寝覚』の中の君が影を落としていると考えられる。そのことを明らかにするために、次節ではこの二人の女性について検討を加えることとする。

三

『夜の寝覚』の巻一冒頭に位置する天人降下事件は、太政大臣の中の君が十三才の折の八月十五夜、彼女が私邸の管絃の宴で弾いた箏の琴の音の素晴らしさに感応した天人が、その夜の夢にあらわれて彼女に琵琶の手を教え、さらに天人は翌年の十五夜の夢にもあらわれ、残りの手を教えた、というものである。

すでに指摘されているように、霊物が秘曲を伝授するという話は、『古事談』『十訓抄』などにのせられて著名な廉承武が村上天皇に秘曲を伝授したというものがあり、これに類した説話は、種々の形で流動しながら存在していたようであるので（4）、ここでもそうした説話が『夜の寝覚』と『松浦宮物語』のそれぞれにあらわれたにすぎないと考えることも可能である。しかし、華陽公主と中の君の類似点はこの一点のみにとどまらない。以下では、両者の関係を明らかにするため、その類似点を探ることとする。

『夜の寝覚』の中の君は、天人から秘曲伝授をうけると同時に予言を与えられるが、最初の伝授の時に天人は、

今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれにひびき聞えつるを、訪ねまうで来つるなり。おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の世の契りなり。これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり（5）

と中の君に告げる。

ここに破線を施した部分には、中の君が天人の秘曲を伝えるべき人物であるという叙述がなされている。これは前節で言及

した弁少将の使命と似通っている。

前節で述べたとおり、『宇津保物語』にもこれと類似の設定が存するので、『夜の寝覚』『松浦宮物語』に『宇津保物語』を加えた三者の関係を探るために比較を行うと、次のようになる。

	予言者	楽器	音楽的使命をもった者
『宇津保物語』	天人	琴	俊蔭（男主人公）
『夜の寝覚』	天人	琵琶	中の君（女主人公）
『松浦宮物語』	陶紅英	琴	弁少将（男主人公）

左には、それぞれの物語と『宇津保物語』との共通点はみられるものの、『夜の寝覚』と『松浦宮物語』との間には要素の上で全く一致するものは見出せない。また前節では、『松浦宮物語』の主人公の音楽的使命を『宇津保物語』の影響として扱ったが、『夜の寝覚』の中の君の天人の予言についても『宇津保物語』の影響を想定するのがよいようである（6）。これらのことを考え合わせると、破線部にみられる『夜の寝覚』と『松浦宮物語』の類似は、両者に影響関係があるために生じたものではなく、それぞれ『宇津保物語』から摂取した結果として生じたものと考えるのが妥当であろう。

さて、『夜の寝覚』と『松浦宮物語』の関係で問題とすべきは、傍線を施した部分である。ここには、中の君が伝授を受けるのは前世からの因縁であることが述べられている。華陽公主の場合も、

女の身なれど前の世に琴をならひて、しばしこの世にやどり給へるゆゑに、おのづからさとりありて、そのてを仙人に伝へ給へり。（7）

と「前の世に琴をなら」ったことにより、仙人から琴の秘曲を授けられたという叙述がみえる。

これによれば、彼女も『夜の寝覚』の中の君と同様、前世からの因縁によって秘曲を伝えられたと考えられる。したがって、華陽公主と中の君は、前世からの因縁によって秘曲を受けるという点において共通するといえよう。

中の君は、翌年の伝授の際にも天人から予言を受けるのであるが、その予言は、

あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな

という彼女の宿世に関するものであった。この言葉は、『夜の寝覚』の主題と構想に関わるものとされ、物語の中で中の君の体験する数々の悲運と不幸を予言したものと理解されている（8）。

一方、『松浦宮物語』でも、少将との契りを結ぶ場面で、

『琴のこゑによりてかならず身をほろぼすゆゑともなるべし』と、仙人のをしへしを思へば

と、かつて仙人が彼女に告げた言葉を思い出しているように、彼女にも仙人による予言がなされていたのである。公主自身の述懐の中で、

この世に命をうけたることといくばくならぬうちに、このかたにみだれあらば、かならず身をほろぼすべき我身なれど、と示されているごとく、この予言の内容は、彼女は、「このかた」（愛情の方面：角川文庫訳）に乱れがあると、命を落とす運命にあるということであった。これは華陽公主が弁少将と契ることによって亡くなるということを暗示しているのだが、華陽公主には、このように男性と契りを結ぶことによって身を滅ぼすという運命が予言されていたのである。

これと中の君への天人の予言とを比較すると、両者には天人（仙人）から不幸な運命が予言されているという点で通じるといえよう。よって、この点においても、華陽公主は中の君と重なり合うのである。

両者の類似点としては、もう一点、伝受の際の年令があげられる。先述のとおり、中の君が伝授をうけた時期は、彼女が十三才の折の八月十五夜であった。華陽公主が伝授を受けた時期に関しては、

いはけなくてこの山に物忌し給ひける秋の月の夜、仙人くだりてこの琴ををしへけるによりて、八月九月のつきのさかりには、かならずかの山にこもりて、このねをならしたまふ。

という叙述がみえる。ここに記されているように、華陽公主がはじめて伝授を受けたのは、「秋の月の夜」であるので、『夜の寝覚』の「八月十五夜」とは秋の月の夜という点で一致する（9）。その際の公主の年令については、「いはけなくて」とあるのみで明示はなく、本文中からは彼女が何才の時に伝授を受けたかを明確に知ることはできない。

しかし、前掲引用文に記される、公主が琴を教えられたことを機縁として毎年「しやう山」にこもるようになったことと、公主自身が「この所（筆者注：「しやう山」）をしめて、このしらべをならふこと七年になりぬ」と述べていることから、伝受時の年令を推測することは可能である。

陶紅英は公主を紹介する際に、「かれは年はじめて廿」と彼女の現在の年令が二十才であると語っている。これと先の公主の発言を考え合わせると、華陽公主が「しやう山」の楼にこもるようになったのは、物語中の現在からは七年前の、彼女が十三才の時からのことになる。

先に述べたように、公主が毎年「しやう山」にこもるようになったのは、ここで琴の伝授を受けたことが契機となっていた。このことからすると、彼女がはじめて伝授を受けた時期と、それを機縁として「しやう山」にこもるようになった時期との間にさほどの開きがあるとは考えにくい。

とすれば、公主が伝授を受けたのは、彼女が「しやう山」にこもるようになった一～二年前ぐらいと想定するのが妥当であろう。これは中の君の伝受時の年令と一致はしないものの、その差はわずかなものであると考えてもよいのではないだろうか。そう考えれば、ここにも華陽公主と中の君との近さを認めるこ

とができるかもしれない。

以上、華陽公主と中の君について、この世ならぬ霊物からの秘曲伝受のほか、前世からの因縁による伝受、不幸な運命の予言、伝受時の年令、のあわせて四点について両者が類似していることを指摘した。これだけの類似点が見られるとすれば、両者に影響関係の存在することは否定しがたいのではないか。すなわち、『松浦宮物語』の華陽公主には『夜の寝覚』の中の君の姿が投影されていると考えて差し支えないのではないか。

ところで、『松浦宮物語』において弁少将は華陽公主から八月十四日と九月十三夜の二度にわたって伝授を受けるが、この点に関しても『夜の寝覚』との関連が考えられないだろうか。

中の君は、十三才の八月十五夜と翌年の同夜に天人から琵琶の伝授を受ける。このことと、『松浦宮物語』の華陽公主から少将への伝授とが関連しているのではないかと考えるのである。この推測を裏付けるものとして、『夜の寝覚』では最初の年の伝授の後、天人が、

この残りの手の、この世に伝はらぬ、いま五つあるは、来年の今宵くだり来て教へたてまつらむ

と語り、『松浦宮物語』でも一度めの伝授を終えた華陽公主が、

こののこりのては、九月十三夜よりいつよになむつくすべき

と、それぞれ次回の伝授を予告していることがあげられる。またこの両者の予告には、文辞的な類似もみられるので、両者になんらかの関連のあることを推測することが可能であろう。

伝授の時期については、二年にわたってのものと、同一年内のものという相違はあるものの、『松浦宮物語』の伝授は「八月十四夜」「九月十三夜」という「秋の満月のころの夜」で、『夜の寝覚』の「八月十五夜」と近いものとなっている。

この箇所に両書の対応が認められるならば、ここでは今まで検討してきたような華陽公主と中の君が直接対応する形とは異なり、『松浦宮物語』は、『夜の寝覚』の天人から中の君への伝授を、一代後の伝授へとずらして摂取したという関係が看取されよう。

以上、華陽公主の造型を中心に『松浦宮物語』への『夜の寝覚』の影響を指摘した。『夜の寝覚』は『源氏釈』『源氏一品経表白』などにその名が見え、また『無名草子』に紙幅を費やして批評されているように、受容のあとが確認できる作品である（10）。『松浦宮物語』の作者と目される藤原定家も、『松浦宮物語』とほぼ同じ頃に選したと思われる『拾遺百番歌合』に『夜の寝覚』の和歌を多く採り、また後に物語を選出する際にも『夜の寝覚』をあげる（『明月記』天福元年〈一二三三〉三月二十日条）など、この物語を高く評価していたらしいことがうかがわれる。これらのことを考え合わせると、『松浦宮物語』に本稿で指摘したような『夜の寝覚』の影響のあることを認めてもよいのではないだろうか。

そうすると、華陽公主には、仙人（天人）から秘曲を受ける

女性、不幸な運命を背負った女性としての中の君の姿が反映されていることになろう。

天人により不幸な宿世を予言された『夜の寝覚』の中の君は、その予言どおり苦悩にみちた人生を送る。一方、少将との契りによって昇天した華陽公主は、日本に転生し、少将と再会してその子を身ごもることになるが、夫に別の女性（鄧皇后）の影を感じ取り、そのために夫への不信と嫉妬に苦しむことになる。

本節で考察した華陽公主と中の君の関係からすると、両者の抱える苦悩は、互いに全く無関係なものとは思えない。日本に転生した後に弁少将との愛に苦悩するという華陽公主の不幸は、彼女が『夜の寝覚』の中の君の姿が投影されたことにより、すでに避けることのできないものとして、予定されていたものではないかと推測することも許されるのではなかろうか。

こう考えると、『夜の寝覚』は、秘曲伝授の場面で華陽公主に投影されているのみでなく、彼女の転生後の人生にまで影を落としているということができ、その華陽公主の造型に及ぼした影響は無視しがたいものであると思われる。

四

以上、本稿では巻一の少将の琴伝受、華陽公主との恋の場面について考察を加えてきた。その結果、この場面には従来指摘されていた『浜松中納言物語』『宇津保物語』のほか『夜の寝覚』の影響を認めることができたと思う。

そして当該場面におけるこれら三つの物語の受容には、『松浦宮物語』がこれを構築する際に、まず『宇津保物語』の主人公への琴の伝授と『浜松中納言物語』の主人公と唐后の恋の場面とを重ね合わせ、それを矛盾なく接合するために、そこに『夜の寝覚』の中の君から摂取した、少将の恋の相手となり得る、仙人から琴の秘曲を受けた女性としての華陽公主を造型した、という経緯が推測される。

そうして華陽公主の造型に取り入れられた『夜の寝覚』が、その後の華陽公主の運命をも規定するものとしてあったことは、前節の末尾に述べたとおりである。

『松浦宮物語』は、このように先行物語を巧みに物語の中に取り込むことによって、人物を造型し、場面を構成している。

各場面や登場人物ごとに先行物語の摂取の様相を明らかにするという、本稿で行なったような作業を積み重ねることによって、『松浦宮物語』独自の物語の方法なり仕組みなりが、より明確に浮かび上がることになろう。小稿もそうした試みの一環として、『松浦宮物語』を読み解く一助たり得れば幸いである。

注

（1）「『松浦宮物語』論―新古今時代の唐土―」（『日本文芸論叢』八、平成二年）。

（2）萩谷朴氏訳注『松浦宮物語』補注（九七）に指摘がある。

(3) 菊地仁氏も、華陽公主は琴の名手である点から『浜松中納言物語』の唐后を連想させるといわれている（「物語作家としての藤原定家―松浦宮物語の位置付け―」『国学院雑誌』昭和五十六年二月）。

(4) 鈴木弘道氏「天人降下事件」（『寝覚物語の基礎的研究』〈塙書房、昭和四十年〉所収）に詳しい。

(5) 本文の引用は、『日本古典文学全集』による。

(6) 鈴木弘道氏注4前掲論文、雨宮隆雄氏「『夜の寝覚』の構想と作者について―「月の都」の天人降下の設定意義をめぐって―」（『平安文学研究』五十、昭和四十八年）、石川徹氏「寝覚物語に及ぼした宇津保物語の影響」（『帝京大学文学部紀要』（国語国文学編）十六、昭和五十九年）坂本信道氏「音楽伝承譚の系譜―『源氏物語』明石一族から『夜の寝覚』へ―」（『文学』昭和六十三・四）など。

(7) 本文の引用は前掲注2書による。その中で萩谷氏は「仙人に伝へ給へり」の「に」は動作の起点を示す格助詞として用いられており、「仙人から」と解釈すべきであるといわれている。時代は下るけれども、鎌倉時代後期成立の楽書『文机談』などには、「～から」と解すべき「に」の用例が散見される。

(8) 『日本古典文学大系』解説など。

(9) ただし、鈴木氏が前掲注4論文で指摘されるように、八月十五夜などの明月の夜に、霊等が現われて、人に琵琶や箏等を教えるという話はいくつか見られるので、ここでは『夜の寝覚』と『松浦宮物語』もそうした一連の秘曲伝授説話の共通要素として、伝授の時期が「八月十五夜」「秋の月の夜」となったものかもしれない。

(10) 『夜の寝覚』の受容については、『日本古典文学大系』解説、野口元大氏『夜の寝覚研究』（笠間書院、平成二年）参照。

（なかはら・かなえ　本学大学院博士後期課程）